

# 博士論文 可否査定資料

申請者  
職・氏名 同志社女子大学嘱託講師 鈴木 里奈

---

学位の名称 博士（英語英文学）

---

---

論文名 The Development of Philosophical Ideas in the Novels of William Godwin and Mary Shelley with a Focus on the Doctrine of “Necessity”

---

審査委員 主 査 甲元 洋子

---

副 査 風間 末起子

---

副 査 上野 和廣 教授（神戸女子短期大学教授、  
日本シェリー研究センター幹事）

---

審査結果 合

2018.9.6 英語英文学専攻博士後期課程委員会 承認  
2018.9.6 文学研究科博士後期課程委員会 承認

# 博士学位論文審査結果報告書

2018年 9月3日

学位申請者	鈴木 里奈
審査委員	主査 甲元 洋子 印
	副査 風間 末起子 印
	副査 上野 和廣 印

同志社女子大学嘱託講師、鈴木里奈より ‘The Development of Philosophical Ideas in the Novels of William Godwin and Mary Shelley with a Focus on the Doctrine of “Necessity” ’ というタイトルの論文を添えて、博士の学位の申請があり、これを受けて公正に審査委員が決められ、主査甲元洋子、副査風間末起子・上野和廣の三名が厳正な審査に当たった。

各委員は予め申請論文を十分に査読した後、2018年9月3日に公開の口頭試問会を開き申請者に対して論文内容を確認する90分にわたる試問を行った。各委員からは忌憚のない質問や意見が寄せられたが、それらに対して申請者は、丁寧かつ明確に、適切な応答をした。この試問を通して、申請者の研究の確かさが十分に確認された。

申請論文において申請者は、18世紀末から19世紀初頭にかけて英国文学界において一世を風靡した自由主義の思想家 William Godwin を取り上げ、彼の思想の中核となる「必然論」を解説・分析し、この理論が彼自身の後の小説と、彼の娘 Mary Shelley の小説にどのように吸収されて変化発展したかを詳細に検分した上で、二人の業績を再評価している。各作品を丁寧に読み解き、時代背景も考察し、多岐にわたる様々な資料に目を通し、先行研究を十分に咀嚼した上で、明快な論理を展開しており、非常に興味深い内容の論文で、高く評価できる。また英語表現も極めて自然で正確である。よって審査委員は全員一致で鈴木里奈の申請論文に対して、博士（英語英文学）の学位を授与するに値するという結論に達した。

# 博士學位論文審査結果要旨

2018年 9月3日

学位申請者	鈴木 里奈
審査委員	主査 甲元 洋子 印
	副査 風間 末起子 印
	副査 上野 和廣 印
<p>論文題名 The Development of Philosophical Ideas in the Novels of William Godwin and Mary Shelley with a Focus on the Doctrine of “Necessity”</p> <p>(要旨) 同志社女子大学嘱託講師の鈴木里奈より上記タイトルの論文を添えて、博士の学位の申請があり、これを受けて公正に審査委員が決められ、主査甲元洋子、副査風間末起子・上野和廣が審査委員として厳正に審査にあたった。</p> <p>学位申請者、鈴木里奈は同志社女子大学大学院博士課程(前期)在学中より英国19世紀ロマン派詩人とその思想背景について着実な研究を継続している。特に19世紀の思想家Godwinの「必然論」に注目し、主にGodwinと娘のMary Shelleyの著作を取り上げ、必然論の変化発展を機軸にして、時代の思想背景なども視野に入れつつ作品の解読と分析を行ってきた。修士の学位取得(2008年)から10年を経ているが、その間に学内外の研究誌に論文を8本投稿して全て掲載されている。また日本シェリーセンターにおける口頭発表や書評担当など、学会への貢献も顕著である。上記申請論文は、申請者の堅実な研究が洞察に富む解釈となって結実していることを明示する内容であった。</p> <p>申請論文はA4用紙204ページからなる英語論文である。Godwinの論文1点と小説2作品、Mary Shelleyの小説1作品を取り上げ、それぞれを1～4の各章で分析している。フランス革命直後の18世紀末から革命熱が冷め保守化が定着しだす19世紀初頭にかけての文学界の動向や、そこでの作家・批評家達の議論などについて、英仏の思想背景も視野に入れて考察がなされている。申請者は131冊の研究書や資料(127冊の英書と4冊の和書)に丹念に目を通し、先行研究を十分に咀嚼した上で、深く精緻な論を、正確で自然な英語表現で展開している。</p> <p>査読者のうち英国ロマン派文学の専門家であり、日本シェリーセンター幹事の上野和廣副査からも、きわめて優秀な論文であるとの評価を得た。よって審査委員は全員一致で鈴木里奈の申請論文に対し、博士(英語英文学)の学位を授与するに値するという結論に至った。</p>	

# 博士学位論文内容要旨

2018年 9月3日

学位申請者	鈴木 里奈
審査委員	主査 甲元 洋子 印
	副査 風間 末起子 印
	副査 上野 和廣 印

(要旨)

The Development of Philosophical Ideas in the Novels of William Godwin and Mary Shelley with a Focus on the Doctrine of “Necessity” は序論、4つの章、結論から成っている。それぞれの内容は以下のとおりである。

## Introduction

この論文では、19世紀英国の急進的思想家 William Godwin (1756–1836) と、彼の娘で小説家の Mary Wollstonecraft Shelley (1797–1851) を取り上げ、二人の作品をそれぞれの根本思想の変化発展に焦点を当てて精査している。Godwin が、*Political Justice* (1793) で披瀝した政治哲学を、後の小説においてどのように変化発展させたか、Mary が父親の思想をどのように解釈して修正し、自分の作品に応用したかを辿りながら二人の文学的業績を明らかにし、その重要性認識の更なる必要性を提唱している。

## Chapter I

Godwin の論文、*Political Justice* (1793)における哲学的思想を分析する。Godwin は非国教徒の家に生まれ、カルヴィン主義の教育を受けて牧師になるが、非国教徒ゆえに被った社会的制約や、カルヴィン主義の専横性に疑問を持ったことにより、牧師の職を辞して1780年以降は専ら無政府主義の急進的思想家として文学界に活動の場を移し、1793年に *Political Justice* を上梓して社会改革の必要性を訴えた。Godwin は人間の理性に絶対の信頼を置き、人間は外的環境次第で完全可能性、即ち、知性と道徳性を無限に向上させる可能性を獲得し得ると考えた。この哲学理論は “Doctrine of Necessity”(必然論)に基づいている。人間の精神の動きは「必然の法則」に支配され、社会の改良は必然的に人間の知性徳性の向上に繋がり、それは更なる社会の改良をもたらし、この改良と進歩の連鎖が人間を導いて完全可能性への道を歩ませるという理論である。*Political Justice* は高く評価され、変革や改革を求める運動の正当性を示す理論的な後ろ盾として多くの人々に受け入れられた。一方で、理論の脆さを指摘する批判もあった。やがて保守派の反発により、急進思想に対する熱狂が覚めて Godwin の人気も急速に凋落し、19世紀に入ってから *Political Justice* は忘れ去られる。しかし少なくとも1790年代、フランス革命直後の「論争の時代」においては、この論文は刺激的であり、重要な意味を持ち、当時の知識人たちに影響を与えたことは間違いない。

## Chapter II

Godwin の小説 *Things As They are; or, The Adventures of Caleb Williams* (1794、以後 *Caleb Williams* と記す) を取り上げて考察する。Godwin は、一般の読者に縁遠かった自著、*Political Justice*(1793) を、小説の形に作りかえて援用し、国家組織の専横の現状を世に知らしめる手段にしたいと考えて *Caleb Williams* を書いた。これは、初期教育の所為で名誉に固執するようになった貴

族 Falkland と、旺盛な好奇心から彼がひた隠しにしていた秘密を知ってしまう秘書 Caleb の物語である。Falkland には自分を侮辱した人物を殺し、その罪を他人に着せた過去がある。Caleb にこの秘密を見破られると Falkland は保身のために彼を迫害して破滅させる。この恐ろしい物語を通して、17 世紀以降の英国社会の制度的墮落の歴史が明らかにされ、特権階級の優遇と一般民衆の窮状が描写される。Godwin は読者に問題提起をして社会改革の必要性を説き、人間の永続的進歩の可能性を示そうとした。*Political Justice* の所産とも言うべき *Caleb Williams* であるが、Godwin は登場人物達を己の必然論の代弁者とはしていない。例えば必然の法則による因果関係を Falkland に当てはめることは出来るが、Caleb の抑制できない好奇心にそれを適用することは難しい。必然論を徹底して適用しなかった所に、*Political Justice* の楽天的な性善説から脱した Godwin の、人間洞察の深化が示唆されている。

### Chapter III

Godwin の小説、*St Leon; A Tale of the Sixteenth Century* (1799、以後 *St Leon* と記す) を取り上げて考察する。18 世紀末、フランス革命が恐怖政治へと移行する中、英国における急進的な社会改革運動は衰退した。人々の文学嗜好は保守化し、社会改革を提唱する啓蒙的な政治哲学の書物は好まれなくなり、Godwin の考え方を公然と批判する者も現れた。この趨勢の中で Godwin も *Political Justice* で示した理性偏重の姿勢や急進的思想を見直して修正せざるをえなくなった。妻となった女性解放論者の Mary Wollstonecraft (1759-97) の影響で、感情の重要性を認識するようにもなっていた。この時期に書かれたのが *St Leon* である。この小説において必然の法則は、登場人物の人生行路をより良き方向へと導かない。初期教育の所為で名誉欲と騎士道的価値観に執着するようになった主人公は、家族の反対を無視して超自然的な能力を獲得し、それをを用いて社会改革を試みるがうまく行かない。主人公の妻、Marguerite は理性と情愛が融和した理想の女性として描かれ、主人公も彼女を敬い愛する。しかし結局彼女は、美德でもって夫の思想や行状を矯めることが出来ぬまま早世し、家庭は崩壊して主人公は社会から逸脱した孤独な放浪者となる。ここに Godwin の、理性偏重主義への反省や感情の再評価が示される。様々な体制下にある多くの国々を経巡る中で主人公は、人間や社会の改善の難しさを思い知る。この小説で繰り返し説かれるのは、社会改革に対する失望と人間の進歩についての懐疑である。フランス革命の結果に人々が疑念を持ち、革命運動が急速に衰退して行く中、己の楽観的な政治理論を再吟味した Godwin は、社会を変え、人類の進歩を実現させることの難しさを認識し、最大多数の最大幸福のために普遍的な慈愛を実現させることと、個人的な愛情を成就させることとの両立の可能性を疑わざるを得なかった。この小説は Godwin の、人間完全性の概念からの後退を示唆している。

### Chapter IV

Godwin の娘、Mary Shelley の恐怖小説 *Frankenstein, or the Modern Prometheus* (1818、以後 *Frankenstein* と記す) について、彼女が父 Godwin の思想をどのように吸収し吟味して自作に取り入れているかを考察する。Mary は幼少期より父親の思想に触れて育った。実母 Wollstonecraft を生後間もなく失い、複雑な家庭環境の中で継母との軋轢に悩みながら娘時代を過ごした Mary の心の支えは父 Godwin の存在であった。彼女は Godwin を尊敬し、早くからその著作に親しんで父の思想に精通していた。*Frankenstein* には Godwin の思想、特に *Political Justice* で説かれた必然論の影響が明らかであるが、*Frankenstein* 執筆時、Mary と Godwin は、彼女と詩人の P. B. Shelley の駆け落ち等が原因で関係が冷えて疎遠になっており、物理的・精神的に父親から距離を置かざるを得なかったことが、Mary に Godwin の著作を冷静に分析し直し、特に必然の法則の不整合を採知することを可能にしたと考えられる。主人公の Frankenstein 博士は優れた科学者であり、生命の神秘を探求して科学技術によって人間を造ることに成功するが、それは醜い容姿の怪物であった。怪物は、外見の恐ろしさ故に全ての人々から忌避されることを悲しみ、自分を造った博士を恨んで彼の家族や友人を次々に殺して復讐し、博士も彼を追いつめた果てに衰弱死する。この痛ましい物語の中に Mary が組み込んだ必然論には、Godwin の必然論の基礎となっていた楽観的要素は皆無であり、ここに父娘の思想の根本的な違いが見て取れる。*Frankenstein* は何度か改訂されて 1831 年に最終版が出されたが、ここに至るまでの間にも Mary は幾つもの大きな不幸(子供二人の夭折、夫の事故死、夫婦共通の友人 Byron の戦病死等)を経験した。*Frankenstein* の中に、抗しがたい運命に対する悲観的な思いが反映されるのは当然である。幾つもの試練を経る中で Mary は Godwin の必然論を見直し、再編成し、彼女自身の必然論へと作り変えた。それが *Frankenstein* の世界に Godwin の作品とは異なる魅力を付与していると言える。

## Conclusion

Godwin と娘 Mary の小説の中心をなすのは、Godwin が *Political Justice* で示した必然論である。Godwin はこの理論を小説 (*Caleb Williams* と *St Leon*) の中で読者に説こうとしたが、保守化に向かう時代の趨勢の影響もあり、思想に揺らぎが生じて十分にそれを敷衍できなかった。一方 Mary は、父親の思想を実生活の中で冷静に吟味し、納得して受け入れられる部分を自分の小説に取り入れた。必然論は彼女の *Frankenstein* に受け継がれていると言える。ただし Mary は、人間の感情や精神には予測できない動きがあることを見抜き、この突発的な激情を理性で抑制することは出来ず、激しい感情の発作は必然の法則を覆し得ると考えた。Godwin が絶対の信頼を置いた科学の進歩についても Mary は懐疑的であった。Mary の小説世界は悲劇の連鎖である。しかしそこには、悲劇をもたらす必然の法則であっても、その背後には神の意思が働いており、人類を救済へ導こうとする慈悲深い神意によって必然の鎖が始動されたという彼女の思想が読み取れる。この点で、Mary の必然の法則は、専ら機械的に作用するのみの Godwin のそれとは異なっている。Godwin の思想に反駁もしている Mary であるが、彼女は父親の思想と業績を高く評価していた。また Godwin も Mary の作品の価値や彼女の能力を十分に認めていた。Shelley の死後、父娘の関係が修復されて二人が互いに支え合うようになるにつれ、Godwin の必然論は Mary のそれと似た傾向を帯びるようになった。Godwin と Mary の作品は、人間が依り頼むべき必然の原理を見極めようとする、生涯をかけた苦闘の産物である。彼らが模索した必然論を理解することが Godwin と Mary の著した作品の真価を理解することにつながるのである。

# 試問結果の要旨

2018年 9月3日

学位申請者	鈴木 里奈
審査委員	主査 甲元 洋子 印
	副査 風間 末起子 印
	副査 上野 和廣 印
(要旨)	
<p>同志社女子大学嘱託講師、鈴木里奈より ‘The Development of Philosophical Ideas in the Novels of William Godwin and Mary Shelley with a Focus on the Doctrine of “Necessity” ’ という論文を添えて博士の学位の申請があった。これを受けて公正に審査委員が決められ、主査として甲元洋子（同志社女子大学表象文化学部特別任用教授）、副査として風間末起子（同志社女子大学表象文化学部教授）ならびに上野和廣（神戸女子短期大学教授）の三名が審査委員として厳正に審査にあたった。各委員は予め申請論文を十分に査読した後、9月3日に公開の口頭試問会（90分）を開いた。</p> <p>主査の甲元が、学位申請に至る経過を説明し、研究発表・活字論文の数など、申請に必要な条件を全て満たしていることを確認した後、申請論文（英文でA4用紙204枚）について厳正な試問を行った。</p> <p>まず甲元が、申請者の研究課題の中心となっている Godwin の「必然論」に関して、申請者がこの理論に注目するようになった経緯を問い、更に続けて、この理論を小説に用いることによって生じる効果と、この理論適用の限界について質問した。</p> <p>続いて各委員から質問がなされた。まず風間副査より、フェミニズムの研究者の立場から、Godwin の妻で女権拡張論者の Wollstonecraft の影響について、彼女の紀行文 <i>Letters</i> (1794)の趣旨、および Godwin の <i>St Leon</i> (1799)に影響を与えた点について質問があった。</p> <p>また上野副査からは、論文の文言についての指摘があり、次いで Shelley 研究者の見地から Godwin と Mary の作品に関して、幾つか鋭い質問がなされた。更に、Godwin が <i>Political Justice</i> で語った思想を詩で表現したとも言われている Shelley に関して、Godwin との共通テーマである社会改革における文学の役割、想像力とモラルの関係、人間完全可能性説などにも質問が及んだ。またそれとともに Godwin と Shelley、Godwin と Mary、それぞれの違いにも注目し、運命論の扱い方や神の扱い方に関して質問がなされた。</p> <p>各委員の質問に対する申請者の受け答えは非常に明確でわかり易く、これまでの着実な研究に裏打ちされて説得力に富むものであった。質疑応答を通して、論文には書ききれなかった筆者の広範な知識も披瀝され、修士の学位取得から今に至るまでの10年間、筆者が続けてきた研究の成果が更に明らかになった。よって三名の審査委員は博士（英語英文学）の学位授与に十分値する論文であるということで意見の一致を見た。</p>	